

様式2

令和6年度 自己評価表（中間評価）

鳥取県立米子工業高等学校

校訓	自律 創造 協働	中長期目標 (学校ビジョン)	ものづくりができる人づくり ものづくりを通しての人づくり	米エミッション	地域社会・産業界に貢献する人財育成	今年度の 重点目標	1 ものづくり人財としての自律した態度と技術の育成 2 ふるさとキャリア教育による在り方と生きがいの創造 3 持続可能な地域社会への協働参画 4 地域ネットワークとの連携 5 向上心とワークライフバランスの実践
				目指す生徒像	自主自律の精神を持ち、他者を思いやる 創造力豊かな工業人		

年 度 当 初						評 価 結 果 （10）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 ものづくり 人財としての 自律した態度 と技術の育成	(1)実践的な技術・ 技能の向上	・各コンテスト・大会に参加し、 中国大会、全国大会に出場。 ・令和5年度ジュニアマイ スター取得者実人数は32名。	・資格検定に意欲的に取り組んでいる。 ・ものづくりに対する興味関心が高まり、自ら技術向上に励ん でいる。 ・高校生ものづくりコンテストなどに積極的に参加し、上位へ 入賞する。 ・卒業生の3割(50名)以上が、ジュニアマイスターを取得して いる。	生徒「自分は実習を通じて、 技術・技能が身についた」等 アンケート集約結果が全体の 80%以上ならばA。 ・卒業生の3割以上の生徒が ジュニアマイスターを取得す ればA。	・実習などをとおしてものづくりの楽しさを経験させ、より高い 技術習得を意識させる。 ・専門の授業において、ものづくりの楽しさと意義を生徒に伝 え、生徒がコンテストにチャレンジする意欲を高める。 ・部活動とのバランスに配慮して取組ができるよう検討する。	・生徒は資格取得に向けて意欲的に取り組んでいる。 ・第二種電気工事士は電気科、環境エネルギー科 合わせて28名が受験し10名合格した。 ・ものづくりコンテストにおいては、旋盤作業部門・ 化学分析部門・測量部門が中国大会に出場。全国 大会に化学分析部門が初出場する。 ・前期のジュニアマイスターは、ゴールド2名、シル バー4名、ブロンズ22名(合計28名、R5年度20 名)	B	・補習及び技術習得、技術向上のため の指導を継続的に行う。 ・ものづくりコンテストに出場できていな い部門は、積極的かつ継続的に生徒へ の声かけを行い参加を促す。
	(2)安全教育による5Sの実践	・実習など日常的に5Sと安全 教育を連動させて指導してい る。	・5Sの意味を理解し、取り組み内容が説明できる。 ・5Sや安全への意識と行動を日常生活に活かしている。 ・自転車用ヘルメットの重要性を認識し、自転車を使用する時 に着用している。	・生徒「5Sの習慣が身につい た」等アンケート集約結果が 全体の80%以上ならばA。 ・ヘルメット着用率が80%以上 ならA。 ・教職員「安全教育について 概ね徹底できた」等アンケート 集約結果が全体の80%以上 ならばA。	・各授業・実習の中で具体的な5Sの目的と取り組みを明示 し、実践することで身につけさせる。 ・5Sの考え方を日常生活や部活動などに転用できるよう考え させ、安全教育を定着させる。 ・保護者、関係機関と協力しながらヘルメットの重要性につい て周知・指導する。	・整理整頓を促すポスターを掲示し、各場面で5S の意識付けを行った。 ・授業や実習等の各場面において5Sの徹底を指 導している。 ・実習を中心に各場面において、安全指導をしてい る。 ・自転車用ヘルメット着用率が年度当初より減少傾 向にあり、約50%である。	C	・生徒の日常生活の中に5Sの取り組み が浸透するようにSHRや授業・実習、部 活動などのあらゆる場面で、継続的に指 導を行う。 ・日常生活の安全を生徒が意識するよう に、学校生活、部活動等においても指導 を継続的に行う。 ・ヘルメットの着用を引き続き呼びかけ る。
	(3)自己研鑽による学力の向上とICT活用	・SPI小テスト・基礎力診断適 性検査等を実施し、必要とさ れる基礎学力のレベルを認識 させている。 ・教職員はICTを活用した授 業展開の方法や今後の教育 のあり方などについて研修し ている。	・SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を活用し、社会人とし て求められる基礎学力のレベルを認識し、就職試験等に対応 できる力をつけている。 ・生徒はICTを活用しながらお互いに協力し合い、主体的に学 んでいる。 ・教職員が授業や生徒指導にICTを活用している。	・SPI小テスト及び授業に関す るアンケートで生徒の肯定的 な回答が80%以上ならばA。 ・SPI小テストの結果が向上し た生徒が全体の80%以上なら ばA。 ・生徒、教職員のICTの活用 が80%以上ならA。	・SPI小テストの実施意義について、年度当初に文書を配布し 生徒に説明する。 ・SPI小テスト実施後に解答を示し、不十分な理解を補うと共 に低得点者に対して学び方を指導する。 ・オンラインコンテンツの活用、他校の視察や校内の授業公 開などで研鑽を積み、生徒の意欲を引き出す授業を展開す る。	・SPI小テストは年度当初に文書を配布し、意義に ついて生徒へ周知した。 ・SPI小テストの実施後にすばやく解答を提示し、 すみやかに学びなおしができる環境を整えた。 ・ChromebookなどICTを活用し、SPI小テスト・アン ケートなど実施した。 ・座学及び実習を含めICTを活用し、生徒の意欲を 引き出す授業を展開している。 ・オンラインコンテンツを活用し、効果的に授業を展開 している教職員が増えている。	B	・ICTを活用した授業づくりに向けた校内 研修を企画する。 ・授業改善・指導力向上の研修として、 Findアクティブラーナーなどのオンライ ンコンテンツの活用を促す。
	(4)バランスのとれた計画と行動力の育成	・遅刻をする生徒が一部に見 られる。 ・レポート、課題など期限内に 提出できない生徒が一部見ら れる。 ・資格検定の補習や各種大会 に参加している。	・規則正しい生活を送り、学校に遅刻することなく元気に学校 生活を送っている。 ・レポート・課題が期限内に提出できるように、計画的に行動 している。 ・資格取得の学習と部活動を計画的に取り組んでいる。	・2学期までの遅刻合計1回 以下の生徒が80%以上ならば A。 ・レポート・課題の期限内の提 出が全体の80%以上ならばA。 ・生徒「計画的に行動すること に関する」集約結果が全体の 80%以上ならばA。	・届けなく遅刻、早退、欠席した生徒の保護者へ連絡を取り、 家庭での基本的生活習慣の改善について協力をお願いす る。また、生徒が抱える現状を職員が丁寧に聞き取り改善の ための適切なアドバイスをを行う。 ・提出物が遅れる生徒に対して、計画的に取り組むように声 掛けをおこない、支援する。 ・大学進学希望者、公務員受験希望者への計画的な指導を 実施する。 ・資格取得を推進し、それぞれの生徒に必要な資格・検定の 選択と受検までの計画の立案を支援する。	・特定の生徒が遅刻を繰り返しているが、保護者と 連携・協力しながら改善に努めている。 ・連絡なしの遅刻・欠席が頻発する事情を抱えた生 徒(家庭)への対応について、関係機関と連携しな がら支援の対応を図っている。 ・提出物が遅れる生徒に対して、提出に向けて支 援・指導を実施している。 ・資格取得については、学習支援員を活用した。計 画的な補習を実施している。 ・公務員希望者に対し、OBから話を聞く機会を設 け、過去問などの情報提供を行うとともに、模試を 実施した。	B	・保護者との連絡をより密にし、特定の 遅刻者に対して継続的な指導をする。 ・支援の必要な生徒に対しては、引き続 き関係機関等と連携しながら支援し、基 本的生活習慣の改善を図る。 ・提出物については、継続的に支援・指 導を行う。 ・大学進学希望者を対象に模試を実施 する予定。
	(5)特別活動と部活動によるコミュニ ケーション力の育成	・部活動への加入率は高く活 発に活動している。 ・生徒会を中心に実施可能な 生徒会行事等を行っている。	・多くの生徒が部活動、生徒会活動やボランティア活動に参 加し、満足した活動を行っている。 ・部活動や生徒会活動をとおして、競技力のみならず、人間 関係やチャレンジ精神をより高めている。 ・生徒会執行部が主体となった生徒会行事が行われている。 ・学校生活及びSNS上のコミュニケーションが向上している。	・生徒会活動に関するアン ケート項目に対する肯定的な 回答が全体の80%以上ならば A。 ・部活動への加入率が80%以 上であり、さらに活動をとお しての満足度が80%以上ならば A。 ・生徒会執行部の70%以上が 主体的に活動できたと認識し ていたらA。	・年度途中で退部した生徒にも、本人の意向を尊重しながら、 他の部活への入部を呼びかける。 ・部活動での大会成果や活動をHPや校内掲示板へ掲載し、 活動の魅力を伝えることで部活動への加入を呼びかける。 ・定期的に生徒会執行部会から情報発信をおこない、生徒会 行事への参加意識を高める。 ・生徒会活動や授業などをとおして、コミュニケーションを円滑 に図れるようにする。	・部活動への加入率は5月1日時点で83%であった。 ・学校での活動に意欲的に参加できるよう、生徒会 執行部への加入を生徒に呼びかけている。 ・生徒会活動による行事の運営や生徒への呼びか け等をとおして、コミュニケーション力の向上を図 ることができた。 ・各行事において、米エMAKERSなどを通して効 果的な発信をすることができた。 ・ものづくりでは、日々技術などを磨き全国大会は じめ上位大会へ出場することができた。 ・ホームページの部活動の更新がされていない。	B	・生徒が教育活動に意欲的に取り組める よう、生徒会執行部を中心に部活動及び 生徒会執行部へ加入の声かけを引き続 き行う。 ・執行部を中心に校則等について考える 機会を設け、主体的に活動する力を育 成する。 ・部活動に加入していない生徒や、途中 退部した生徒に、各部活動顧問と連携し ながら声かけを行う。 ・ホームページの部活動を更新を行う。

年 度 当 初								
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 ふるさと キャリア教育 による在り方 と生きがいの 創造	(1)倫理観のある 人づくりの実践	・生徒の挨拶は概ねできているが、自ら挨拶できない生徒が見られる。 ・思いやりに欠けた言動やSNSなどによるトラブルがみられる。	・自ら挨拶ができ、場面に応じた言葉遣いができるなど、マナーがさらに向上している。 ・周囲の人など他者への理解・配慮した行動ができる。	・教職員「生徒の挨拶は良い」「生徒の言葉遣いは良い」等アンケートの集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・対人関係のトラブルの減少	・登校時、授業開始時など様々な機会を捉えて挨拶の習慣化を図る。 ・地域との交流や実習などの協働をとおして、他者理解を図る。	・生徒の多くは、自発的に挨拶している。挨拶のできていない生徒には教員側から積極的に挨拶をしている。 ・授業開始時および終了時の挨拶を通し挨拶の習慣化を図っている。 ・生徒間のいじりやからかいからトラブルが発生した。 ・日常の会話やり取りの中で、不適切な発言や人権侵害につながる危険性のある発言や行動が見られる。	C	・挨拶については、継続して指導を行う。 ・生徒の日常生活の会話や人間関係について、様々な場面において、的確な指導を行う。 ・日常の行動で人権について生徒及び教職員一人ひとりが振り返りと検証を行う。 ・全職員で人権が尊重される学校について議論し、差別や人権侵害を許さない学校の文化を醸成していく。
	(2)生涯を見据えた 生き方の構築	・就職希望者については100%の就職率を達成している。 ・進学希望者については国立大学へ5名合格した。 ・地元企業見学・県外企業見学を実施。 ・インターンシップを実施し、生徒の職業観及び専門への関心が向上した。	・進路実現に向けた主体的な取組を行い、生徒が満足できる(納得できる)進路決定を行う。 ・多くの生徒が第1希望の進路先に内定または合格する。 ・実際の現場を見学することにより専門科目に対する興味関心が高まり、意欲的に日々の学習に取組んでいる。 ・企業現場での実習を通して専門的な知識や技術・技能に触れることで、進路に対する意識が高まっている。	・進路指導及びインターンシップ・企業見学に関するアンケートで生徒の肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。 ・生徒の第1希望の進路先への内定または合格が90%以上ならばA。	・生徒が主体的に進路選択を行えるよう、キャリアパスポートを活用する。 ・進路状況や進路に必要な知識・技能に係わる情報を、LHRや進路講演会などを通じて適宜提供する。 ・求人票や指定校一覧を生徒各自のICT機器で閲覧できるようにし、家庭で進路決定の資料として活用できるようにする。 ・面接指導、個別指導を実施し、効果的組織的な進路指導を行う。 ・企業を見学することにより、産業全般に対する認識を深めさせ、将来の進路選択に明確な目標を立てさせるとともに、所属学科や専門科目に対する興味関心を喚起する。 ・訪問によらない企業を知る方法を検討する。 ・インターンシップでの受入企業を確保し、実際の現場で作業をさせることにより、仕事の大切さ・意義・困難さを体験させる。また産業界での知識や技術・技能を学ばせることによつて、日々の学習への意欲や積極性を喚起する。 ・資格取得に向け、放課後・長期休業中に補習を行う。	・キャリアパスポートを進路LHRで活用した。 ・学年全体の進路LHRや保護者対象説明会を実施し、タイムリーに情報提供した。 ・求人票や指定校一覧をGoogle共有ドライブに掲載し、生徒個人の端末から閲覧できるようにした。 ・面接指導を全教員で取り組むと共に、今年度からグループディスカッションの指導も行った ・インターンシップについては、受け入れ先企業と連携し、10月下旬の実施に向けて準備を進めている。また、地域コーディネーターの方に企業との連絡調整を行っていただいた。 ・県外企業研修旅行を9月上旬に実施。生徒アンケートにおいては、満足度が高かった。 ・1年生の県内企業見学は、建設科が9月上旬に実施。他の科も今後実施する予定である。 ・資格取得に向け、学習支援員の方を含め放課後・長期休業中に計画的に補習を行っている。	B	・就職一次応募で不合格の生徒に対し、時を空けない指導を行う。 ・進学希望者に対し、担任と連携して志望理由書等の指導を行うことに加えて面接指導を組織的に行う。 ・充実したインターンシップとなるよう企業と連携し、事前・事後学習など生徒への指導を継続する。 ・引き続き、生徒の資格取得に向け、補習等の支援を行う。
3 持続可能な 地域社会への 協働参画	(1)ユーザー視点 による地域課題への 貢献	・地域貢献活動を各科が積極的に行っている。 ・課題研究で身近な課題に関するテーマ設定を設定した。	・地域の課題を解決する取組や身近な人の困りごとを解決する支援活動により、ものづくりの意義を学び、自己有用感が高まっている。 ・課題研究発表などで参加者に分かりやすく伝える工夫している。	・ものづくりをとおして地域社会に貢献するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。	・地域や身近な人の課題に目を向けさせ、自分たちの学びで関われることを考えさせる。 ・課題研究を支援することで、生徒が地域課題へ積極的に取り組む。 ・生徒が地域課題を発見し、テーマや研究内容の設定を生徒主体で取組むように指導方法を工夫する。 ・課題研究の計画、中間報告、最終報告をHPに掲載し、取組を公開する。	・課題研究において、生徒が地域の方などと接することにより新たな課題の発見とその解決に向けて模索している。 ・今年度もマチナカクリスタルのイベントへ参加予定である。 ・機械科、建設科では近隣自治体などからの依頼を受けゴミストッカー、木製遊具・ベンチを作製したり、白線引きを行った。情報電子科・建設科でねりんビックのカウンタダウンボードを作製した。	B	・引き続き地域の方と関わり、地域の課題など解決に向けて取り組んでいく。 ・地域など外部の方と関わる機会を増やし、生徒のコミュニケーション能力を向上させる。
	(2)防災・減災への 専門力の活用	・啓成小学校との合同避難訓練を年1回実施。 ・雪かきボランティア活動を行った。 ・災害時をテーマに課題研究で取り組んでいる。	・合同避難訓練などをとおして、防災への意識の向上を図り、将来災害時に行動できる。 ・課題研究で専門性を活かし、地域に即した災害・減災について取り組んでいる。	・生徒「課題研究等の取り組みを通して、防災に関する」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・合同避難訓練・授業などを通じて、生徒が防災について専門性をどのように活かすかを考えられるようにする。 ・生徒会を中心に「雪かきボランティア」への声掛けを行う。 ・課題研究で安心安全な社会を実現できるように研究活動を教員が支援する。	・南海トラフ地震の危険性が叫ばれる中で、の、課題研究における、防災・減災に関する取り組みは生徒が自分事として捉え、主体的に考え行動することができている。 ・避難訓練や環境教育講演会などを通して、防災意識を向上させている。	C	・引き続き課題研究で防災・減災に取り組んでいく。 ・引き続き避難訓練等を通して、防災意識を向上させる。
4 地域ネット ワークとの連 携	(1)地域と連携した 教育活動	・中学生体験学習・学校見学を実施。 ・中学校への出前授業は1校実施した。 ・社会人講師による技術指導を実施している。	・出前授業等で様々な異校種連携をとおして、小中学生がものづくり教育への関心を高める。 ・地域の人財を活用して専門的技術を習得し、資格を取得している。	・生徒、教職員「地域貢献」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・地域や身近な人に具体的な製作物やシステムを提供する生徒の活動にアドバイスと支援を行う。 ・中学生体験学習や学校説明会で、ものづくり教育の意義を理解し、関心を高めてもらえるよう内容をブラッシュアップする。 ・資格取得に向け、地域の人財を活用したサポートを行う。 ・ICTを活用した新たな交流方法も検討する。	・中学生体験学習においては、生徒が説明することで中学生にものづくりの楽しさを伝えることができた。 ・電気科・環境エネルギー科に加え今年度から機械科が出前授業に取り組んでいる。 ・学校祭において、各産業界の方に業界に関するブースを出展をしていただいた。 ・産業界の方に地元企業見学のオープンファクトリーを実施していただいたが、希望する生徒が少なかった。 ・学習支援員による測量士補、2級土木施工管理技士補の資格取得支援を行っている。 ・各種産業界の協会関係の方に技術指導・現場見学などを実施してもらい、生徒の専門性への理解・関心につながっている。	C	・小中学校への出前授業に今後取り組む。 ・引き続き各種産業界の協会関係の方の協力を得て、技術指導・現場見学などに取り組む。 ・企業展示・オープンファクトリーなど業界との連携については、実施方法などを検証・検討を行う。
	(2)米工教育活動 の発信	・学校から情報発信を行い、学校理解を進めている。 ・米工MAKERSを週2回発行している。	・ホームページ、マチコミメール、マスメディア等を通じ、学校情報の発信をタイムリーに行う。 ・米工MAKERSでは学校の取組に加え、生徒の何気ない成長を取り上げた内容となっている。	・教職員「中学生体験学習・学校公開等を通して、中学校や保護者へ本校の内容を概ね伝えることができた。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・保護者「家庭への連絡がきめ細かく行われた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・見やすいHPのデザインを検討し、変更する。 ・ホームページの内容(学校行事・部活動報告など)を定期的に更新するなど、積極的な情報発信に努める。 ・マチコミメールを活用し、保護者へ情報を迅速に伝える。 ・報道機関への資料提供を行う。 ・魅力ある情報発信の手段として、SNSなどの活用を検討する。	・ホームページや米工MAKERS(火・金発行)を活用し、各科・分掌の取り組みや学校行事など情報発信に努めている。 ・マチコミメールを活用し、保護者への情報提供を行っている。 ・各科・各部活動の情報発信が散発的になっている。	C	・引き続き迅速な情報発信に努める。 ・各科・各部活動の情報発信が積極的に行えるよう、HPへの掲載方法に関する研修会を行う。 ・HPのデザインの変更をする。 ・TikTok・XなどSNSの活用を再検討していく。

年 度 当 初						評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
5 向上心とワークライフバランスの実践	(1) 自己研鑽	・オンラインコンテンツを利用するなど自らを高める取組を実施している。	・自己研鑽に励み、生徒の成長を支援する力量を高めている。	・研修会に参加するなど具体的な取組を実施した。	・自ら高めたい目標を設定している。 ・研修案内を意識し、積極的に参加する。 ・今後必要となる専門的な知識・技術の習得のため教育書籍やオンラインコンテンツを活用する。	・職員室掲示板等を活用し、研修案内を提示している。 ・オンラインコンテンツを活用し、効果的に授業を展開している教職員が増えている。 ・研修に参加している教職員が限定的である。 ・Findアクティブラーナーを活用している教職員が、昨年度より減少している。	C	・引き続き研修案内を提示などし、積極的な参加を促す声かけなどを行う。 ・自己研鑽の時間が確保できるよう定時退勤を促すなど、業務改善を検討する。 ・自己研鑽した知識や技術を授業等で還元していく。 ・Findアクティブラーナーの活用を促す。
	(2) ワークライフバランスの取組	・コロナ禍で時間外業務時間が削減されたが、コロナが収束して増加傾向にある。 ・計画的に業務を行っている。 ・部活動計画を立て長時間の勤務にならないよう取り組んでいる。	・必要なものが必要なときにすぐ取り出せる状態にある。 ・業務上の様々な資料について、再利用、共有できる状況にあり、次に業務に当たる職員が円滑に取り組め、業務に当たる時間が削減されている。 ・部活動は平日3時間以内、休日(週休日・休業日含む)は4時間以内、土日のどちらかは休みを実践。 ・職員、生徒共に家族や地域での活動時間、自己研鑽時間が確保できている。	・教職員「ものの定位置を決め、実践できた」職員が80%以上ならA。 ・全教職員が時間外業務月45時間以内、年間合計360時間以内ならばA。	・ものを置く場所を決め、定位置に置くことを励行し、整理整頓に努める。 ・各自が資料の整理方法についてルールを決め実践する。 ・担当した業務において、気づいた改善点はすぐに反映させ、資料の修正、申し送り事項を作成する。 ・業務シートを活用し、先を見通した業務計画、準備計画を作成し実施する。 ・適切な部活動計画を立て、長時間勤務を防止する。	・印刷室、資料室の棚の整理整頓が維持されている。 ・年度末までに業務改善シートの作成を呼びかけた。 ・9月末時点で時間外業務時間が月45時間を超えた教職員は延べ 11名、6ヶ月の合計時間が180時間を超えた教職員は13名となり、昨年度同時点より減少した。	C	・引き続き整理整頓を心掛ける。 ・個人の時間外業務時間を把握するために時間外業務の状況を2学期末までにも提示する。 ・部活動実績を確認し、適切な部活動計画に反映させる。 ・業務シートを活用し、分掌内の業務改善・分掌間の連携の促進を図る。

評価基準	※評価基準に複数の目標を設定している場合、全ての目標を達成してA評価とする
アンケート結果によるもの (部活動関係も準ずる)	A 80%以上 B 70%以上～80%未満 C 60%以上～70%未満 D 50%以上～60%未満 E 50%未満